



東雲ルート5F目の雪壁

五峰の岩場・Ⅳ

五峰の冬・冬季初登攀

登攀倶楽部・岐阜

五峰の冬季登攀は東南稜を除けばいずれも五登以内であり、特に南壁、東壁中央フェイス岩稜会ルート、中央稜、東北稜などは二登を許していないし、東南カソテ、中央ルンゼ奥壁右岩溝、メガネハソグダイレクトルートは未登のままである。

私たちはこの五峰の冬季登攀に取り組んできて四ルートの登攀に成功した。東南壁、東壁中央フェイス東雲ルート、中央リンネ、東北稜の各ルートであり、このうち東雲ルートと東北稜は冬季初登攀の記録である。今回は四ルートの中から二つの初登攀の記録を紹介したい。

《東壁中央フェイス東雲ルート冬季初登攀》

◇一九七二年一月一日～二日

◇パーティール望月忠、岩間袈裟巳、川島繁男

〔入山〕

十二月三十日に沢渡から入山し、木村小屋へ登山届を出す。この日は養魚場までの予定で、まだ先着者のいない冬季小屋に着いたのは午後一時を回った頃であった。早速ザックを降ろして一等席を占

有する。このあとしばらくして他のパーティが入ってきて小狭くなってきたので早めに寝る。

翌三十一日は無風、快晴の絶好の登攀日和ながら、リーダーの体調が思わしくなくて沈滞。やむなく明日のアタックに備えて一日中ブラブラして英気を養う。

〔アタック〕

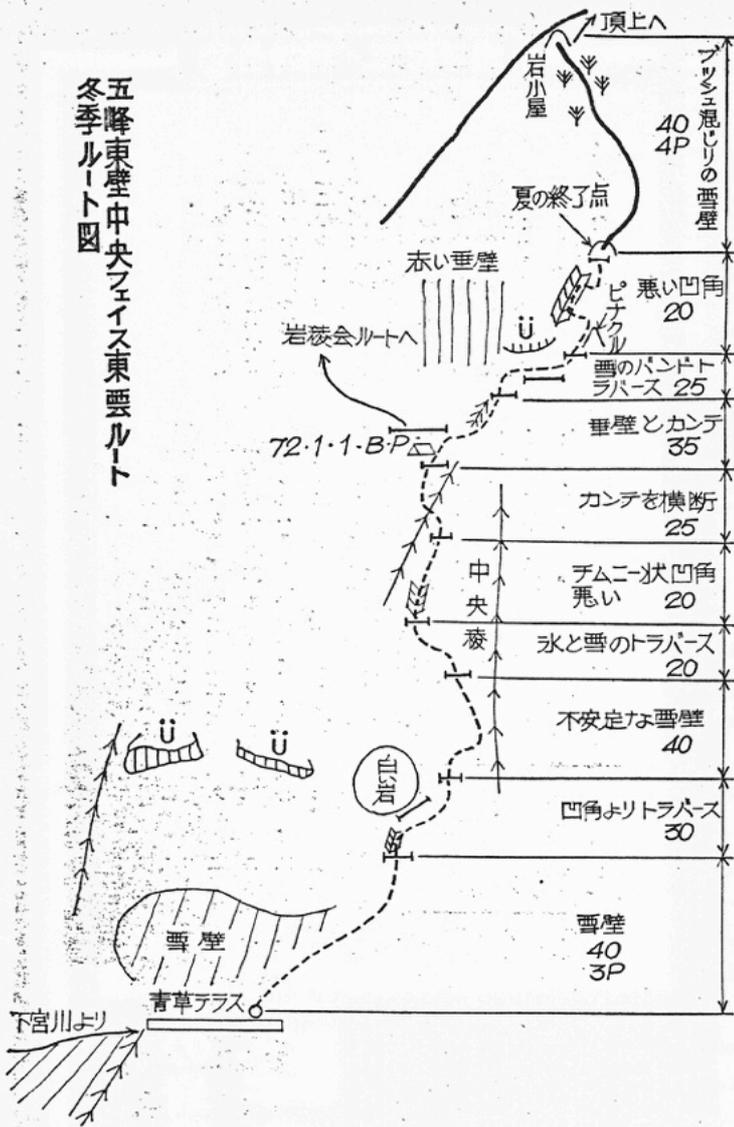
一月一日(晴後雪) 四時半に養魚場を

出発。外は満天の星空であるが、気温は意外に高い。登攀用具と食糧でずっしりと重いザックを担いで樹林帯を三〇分ほど登ると、下宮川に出る。先日の雨とそのあと二、三日の高温続きで川原いっばいにデブリが拡がっている。

リーダーの忠さんは年のせいか、体調が悪いためかバテ気味。ゆっくりしたペースで下宮川を詰める。空が白んでくるとともに、天候悪化の兆である黒い雲が空を覆ってきた。

急な雪壁になっている下宮川奥壁の基部を慎重にトラバースして、青草テラスに出る。今は雪田となっているテラスで

五峰東壁中央フェイス東雲ルート
冬季ルート図



登攀準備をする。この頃から天候の悪化は決定的になってきた。
登攀オーダーはトップに岩間、僕(川島)がミドル、ラストが望月という順で登りはじめる。傾斜の緩い最初の三Pほどは雪壁状であるが、二P目に幅五〇センチほどの亀裂が走っており、気味が悪いうえに乗越しても苦労する。三P目は右上にトラバース気味の登りで浅い凹角を目指す。
四P目、ここから岩が現れ、最初は浅

い凹角を登ってテラスに出る。そこから右上にトラバース気味に登り、再びテラスに出たところでロックハーケンとアイスハーケンを打って確保。三〇P。この頃から雪が降り出した。
五P目は左手の雪壁を約七P登り、傾斜の緩いスラブを右手にトラバースして中央稜ぞいの雪壁に出て、スノーシャワーがさかんに落ちてくる中を直上する。この壁は斜度もあり、雪が腐り気味の上、ビレイポイントがまったく得られず悪か

った。四〇P。いっばいのピッチ。
六P目、左上方に見えるガリー状の凹角めがけて氷と雪のミックステラスをトラバースして凹角入口まで伸ばす。二〇P。
七P目、凹角に取りつき、残置ハーケンにザイルをセットして三Pほど登るが、岩に氷が付着して手強く、トップは氷に切ったホールドから手を滑らせ墜落。再度アタックして微妙なバランスで七P直上し、そこから左手に三Pトラバース後

雪壁に出てこれを登る。
二〇P。
八P目、無雪期三級ぐらいの登攀で、左へカンテを乗っ越して中央バンドに達するこのピッチは、今はただ雪壁と化しているが途中の三Pほどの雪壁に手こずる。二五P。このピッチを終えたところから天候悪化が激しくなる。九P以後は終了点まで格好のビバーク地がないこともあって、時間は早いビバーク態勢にはいる。ビバークプラッツは岩稜会ルートの第二ザレ場のやや右下あたりで、雪壁と雪壁との境界に三人で交互にビッケルとコッヘルで半雪洞を掘る。
十一月に登った時は雪洞など論外のビバークであったが、冬の登攀は冬だけのことはあって、快適なビバークサイトが出来るものである。
どうにか三人が坐れるスペースをとる。以後は楽しくもあり、窮屈でもある長い夜が始まる。入口にはさかんにスノーシャワーが落下しているが、雪洞の中では(計画ではメガネハンダとの連続登攀を予定していたので食糧は充分あった)一晩中食べてばかりいた。また東稜に登っている栗本パーティとの交信もあり、忠さんの歌がとび出すなど、にぎやかな一夜を過ごす。

「タイム」養魚場(四・三〇) 青草テラス(七・〇〇) B.P.(二・〇〇)

雪壁 40 3P
凹角よりトラバース 30
不安定な雪壁 40
氷と雪のトラバース 20
中央稜
テムニ状凹角 20
カンテを横断 25
72.1.1.B.P.
赤い垂壁
悪い凹角 20
雪のバンドトトラバース 25
岩稜会ルートへ
夏の終了点
岩小屋
頂上へ

か入らないハーケンを頼りに、右上に微妙なバランスを強いながらトラバース気味に進む。そのあと四層ほどの被り気味の垂壁をアプミで乗っ越すところは、夏と違って出口が氷で覆われている。ホールドが隠されているのでかなりのテクニクが要求される。フリーで五層ほど直上するとほぼザイルが一杯になってピッチを切る。困難なピッチであった。

一〇P目、ここはこのルート中の最難関である二〇層の赤い凹角の基部までだ。最初は確保地点の左側のフェイスを六層ぐらい直上し、頭上のハイマツをつかんで強引に雪壁に出る。無雪期は草付のバンドになっている場所、今は雪を払い落としながらの慎重なトラバースで突破する。バンドの終点にある赤い小ピナクルまで行ってザイルを巻きつけてビレイ。二〇層でピッチを切る。

一一P目、このピッチで事実上の登攀は終了するが、頭上には夏季でも非常に困難な二〇層の凹状フェイスが待ち構えている。ここは十一月下旬に、途中でのルートファイディングの誤りなどで時間を費やし、この基部でビバークした僕と木村は、その夜に新雪に見舞われ、翌日はこのルートで二回も墜落し、アイゼン、ピッケルがなかったために一日がかりで登ったという、因縁つきのピッチである。

この経験からこのピッチは、わが倶楽部きつてのバランスクライマーである岩

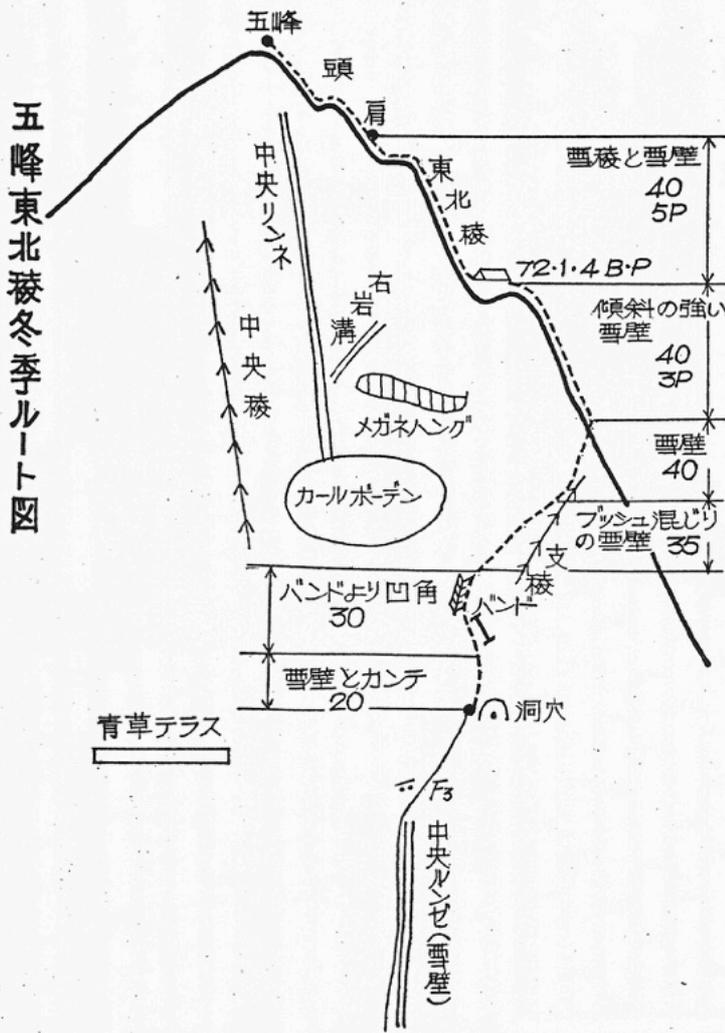
間が空身でアタックを試みる。

ピナクルの真ん中を走っているクラックを登って一旦ピナクルの頭の上に立ち、さらに左手のハング気味の岩の出っぱりをかかえこむようにしてトラバースし、問題の凹状の中に入った。ここからは垂壁の草付クラックを五層直上し、赤いスラブを右へ横断する。トップはさすがに安定したバランスで登っていくが、核心部だけにザイルの流れはぐっと遅くなる。出口はハング気味で脆い岩と草付クラックがミックスされていて、ハーケンがあまり効いていず、非常に嫌なところである。十一月の登攀ではいずれもハーケンが抜けて墜落した。岩間はハーケンに頼らず、草付と草との間に出来た空洞にピッケルを差しこみ、それにアプミをセットして乗っ越していく。ここを越えようとや傾斜の落ちた凍った草付フェイスとなつてピッケルを打ち込みながら

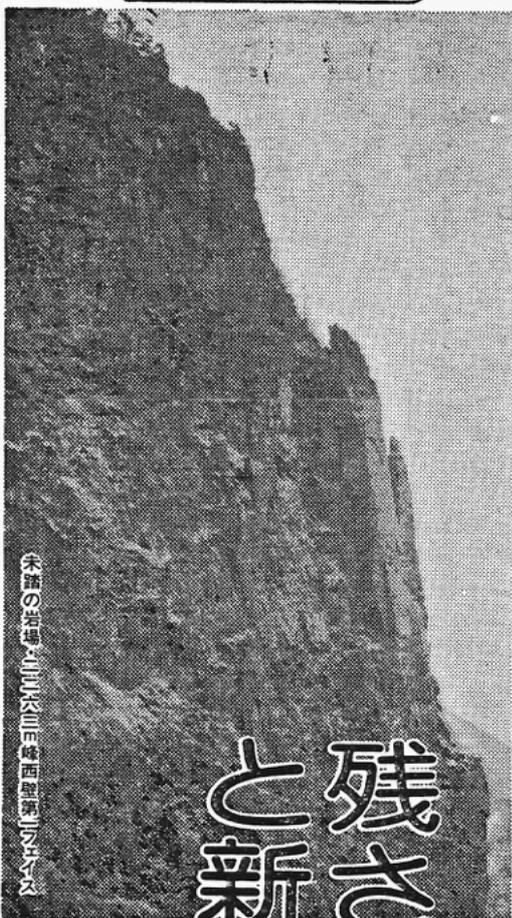
の登攀で五層登ると、夏の終了点である一枚岩に達し、さすがの難関も克服。このピッチはトップの岩間だけで一時間弱を費やす。セカンドとラストは半分以上ゴボー登りを続けて時間を短縮する。この一一Pで事実上の登攀は終わった。ここからはブッシュ混じりの雪壁を四層ほど登って稜線に出たが、最初のピッチは急な上にブッシュもなく悪い。一五時頃岩小屋に着き、登攀の緊張から開放される。

一休みした後、最後の頭張り待望の五峯の頂上に立ち、がっちり完登の握手を交わして、初登攀の喜びを分かち合う。

頂上からは二六三層寄り設置してある本隊のテントに向かって一目散に駆け下り、テントにこるがりこむ。
(タイム) BP (八・一〇) 夏の終了点
三・〇〇) 五峯頂上 (一六・三〇)



五峯東北稜冬季ルート図



未踏の岩場と二二六三の峰西壁第一フェイス

残された未踏ルート と新ルート

登攀倶楽部・岐阜
岐阜

「残された未踏ルート」

明神岳の未踏ルートについては連載中にその都度紹介してきたが、この連載の最後にあたってそれらを地域別に区分し、整理した上で少し詳しく紹介したい。

二二六三の峰周辺

西壁ⅡS字ルンゼの右壁にあたるこの壁は、上高地からもその柱状岩稜を望むことができる第一フェイスと第二フェイスが残されている。

第一フェイスは、S字ルンゼの屈曲点の手前二〇〇メートルくらいから始まる壁で、下部は一樣にハング気味で逆層の岩場と

なっている。中間部には大洞穴が存在し、上部は素晴らしいカンテが空に向かって突き上げている。

登攀のポイントは下部の逆層帯の突破と思われ、脆い岩の登攀は一層の難しさを提供している。また、上部は傾斜が急で、直上するには人工登攀となりそうである。全体のザイルピッチは一〇〜二二Pくらいと思われる。

S字ルンゼの核心部の手前に位置する第二フェイスは、下部が前傾ハング帯、中間部が草付帯、上部が垂壁帯となっており、第一フェイスに比べて岩質は固そうである。

ポイントは、下部のハング帯の突破と中間部の草付帯の処理と思われる。ザイ

ルピッチは八P前後と見られるが、上部はブッシュ帯となっているので、その分だけピッチが多くなるであろう。

南壁Ⅱこの壁は幅広い割にはルートが左半分に集中しているため、今後は基部洞穴より右側のフェイスが目標にされるだろう。

右フェイスでは、右端のルンゼ、その左に広がる下部が草付帯となっていて、上部にハング帯が存在するフェイス。それと、南壁沢の突き当たりの草付クラックなどに開拓の余地がある。いずれもザイルピッチは六〜七Pと短い。逆層の岩なので登攀はデリケートなものになるだろう。

南壁に残されたもう一つの課題は、左

ルンゼのさらにもう一つ手前から始まる南壁ルンゼである。これは取付から圧倒的な垂壁となっており、合計五つほどと思われる滝はいずれも垂直に近い斜度を持っていて難易度は高そうである。ザイルピッチは一〇Pくらいと推定され、登攀にはかなりの数のハーケンとボルトが必要と思われる。

東壁Ⅱ今年になって正面フェイスと右フェイスが登られたので、残る未踏ルートは奥壁だけとなったが、この壁は大きいのでほとんどのルートは人工登攀を避けている。従ってダイレクトルートを考えれば、まだまだ開拓の余地はある。

正面壁では上部ハング帯の直上ルートの完登が期待される。ここはハングと垂

壁が一〇〇呎ほど続いており、下部の登攀を入れると一〇P前後のルートとなる。ただし、岩質がやや固そうで、ポルト打ちが苦戦を強いられると思われる。

右フェイスでは大ハング寄りの圧倒的な垂直帯の直上が残されている。中間にブッシュのバンドがあるが、下部、上部ともハングが連続して岩も固く、絶好の人工登攀となりそうである。ザイルピッチは、ダイレクトに登った場合は四〇呎で五Pプラス草付一Pぐらいである。ハーケンとポルトは七〇〜八〇本程度必要と思われる。

最後の未踏ルートである奥壁は、右フェイスの大ハングよりさらに奥に位置しており、幅一〇〇呎、高距一五〇〜二〇〇呎ぐらいのスケールである。岩質は遠望したところではやや脆そうに思われる。登攀は最上部を除いてフリークライミングで登れそうである。問題は草付フェイスと脆さの克服ということになるが、ザイルピッチは六〜七Pと思われるが、取付までのルンゼの傾斜が強そうなので、その部分がスタカットになるともう少し増える。

東壁を代表する右端の大ハングも手ごたえのあるルートである。張り出しは大きいところで一二〜一三呎はあると思われる、ハングの出口まで一Pが終わってしまいうさである。下から見ると試登の跡が見受けられるが、あるいは完全登されているのかも知れない。

五峯周辺

下宮川奥壁 下宮川のどん詰まりから東南稜に突き上げるこの壁は、南壁との境目あたりの上部が脆そうであるが、左上気味の白いルンゼ状の壁は固そうである。

ザイルピッチは六〜八Pと思われるが、下宮川の上は傾斜が強くなっていて、その部分と比べればもつと長くなる。惜しいのは終了点が頂上とかなり離れていることである。

南壁 初登ルートは左端のチムニーであり、そこから東南カンテまでに拡がる八〇呎ほどの間には、下部の青草テラスからバンドまで二本のルートがある。バンドからの垂直帯にはルートはない。従って今後開拓するとすれば、東南カンテとノーマルルートとの間のダイレクトルートが考えられる。中央に大カンテがあるのでそこを直上する人工ルートが面白そうである。バンドから四〇〜三Pで、そのほとんどはハーケンとポルトの連打が必要と思われる。

東壁 ここは登り尽された感じでルート開拓の余地はほとんどなさそうである。あえてあげれば、中央ルンゼ奥壁の中央リッペと右岩溝との間にある垂直帯であろう。ザイルピッチは六〜七Pで、二Pぐらいは人工となりそうである。

主稜線周辺

主稜線東面 此の岩場はほとんどが尾根ルートであり、岩壁として存在するのは一、二、三峯の頂上岩壁だけで、通常、バットレスと呼ばれている。

主峯バットレスは、正面が東稜ルートの一部となっていて、下又白側に落ちる草付混じりの雑然とした感じのフェイスが登攀の対象となる。草付が多くてあまり快適な岩場とはいえない。また下又白谷に面しているので取付がやや面倒であり、奥又白の池のあたりから取りついても一案と思われる。

二峯バットレスは主稜線走中の難所となっており、頂上より一・二峯間ルンゼ側に切れ落ちた壁はピッチこそは三Pぐらいと短い、傾斜は急である。

三峯バットレスも二峯バットレスと同様にスケールとしては小さい。ただ、三峯東稜とつなげて考えれば六Pぐらいのルートとなるので登攀対象としてもよいであろう。岩質は非常に固く、スッキリとした登攀が味わえそうである。

主稜線西面 主稜線より岳沢側に落ちている沢やルンゼの側壁が昔から登られており、特に前明神沢と奥明神沢の方にスケールの大きい岩場があり、最近でも東京水産大パーティによる記録が発表されている。私の知っている前明神沢の岩場は数ピッチで終わりそうな側壁ばかりだが、水産大パーティの記録では九Pのルートである。

奥明神沢周辺の岩はいかにも脆そうであるが、リッジをルートに取れば意外に登攀可能なところがあるかも知れない。いずれにしても主稜線西面の岩場は未知の部分が多く、われわれとしても今後の研究課題でもある。従って詳細な解説については他日を期したい。

「二二六三」峯の新ルート

今年になって南壁に一ルートと東壁に二ルートの新ルートが開拓された。このうちわれわれが成功した二ルートを紹介したい。

東壁右フェイス初登

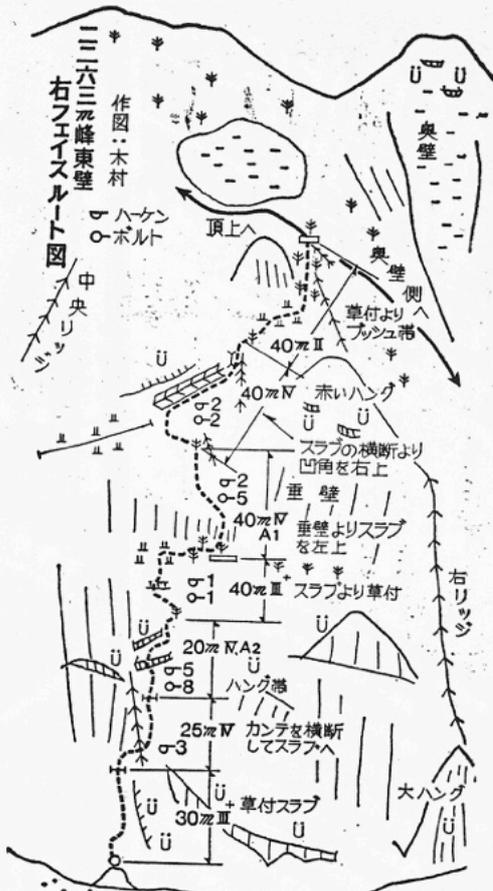
◇一九七八年八月二十六日〜二十七日

◇パーティ 木村智、長江洋一

二十六日(晴)。久し振りのワサビ沢の溯行は、上部のガレ場に上がるところから踏跡が不鮮明となっていて手間取る。取付で昨年デポしておいたハーケン類を回収する。

一P、頭上の草付フェイスを直上し、行き止まりとなった地点で、ハングにハーケンを打って不安定なビレイを行う。取付から三〇呎。

二P、頭上のハング直上をあっさりとは放棄し、右ヘカンテを回り込むことにする。ハーケンを二本打ち、逆層の岩をフリクションで登って右へ回り込むと傾斜の緩いスラブ帯に出た。まだザイルは二五呎しか伸びていないが、次にハングが



待ち構えているのでビッチを切る。

三P、最初から登攀は被り気味の人工となつてボルトとハーケンを交互に打つて高度を稼ぐ。一〇段で今度は此ハングが現れ、ここを苦しいボルト打ちで抜けるとすぐに第二の庇ハングが現れた。このハングは根元にそつて右上気味に巻いて突破する。出口は再び被つた壁となつて行手を阻んだが、意外と早く抜けてテラスのブッシュに着く。このビッチは二〇段でボルト八本、ハーケン五本を使用。四P、二層ほどの出だしの垂壁が越えられず、ボルトを一本埋めて上部の草付フェイスに出て中間バンドのブッシュ帯に入る。さらにそのまま右上気味にブッシュ帯を進んで大木でビレイ。

〔タイム〕ワサビ沢出合(六・二〇) 取付(七・五〇) BP(一五・二〇)

二十七日(晴)。頭上は一連の垂壁とハングが連なつており、手持ちのボルトが残り少ないわれわれは、できるだけ高距の短い部分を選んで通算五P目の登攀を開始する。

最初からいきなり人工となり、ボルト、ハーケンを連打して、スカイフックまでも使つて一五層の垂壁を突破する。出口は左上に細いバンドにあがつて逆層のスラブ帯に入り、ザイルが一杯になったところで不安定なビレイ。このビッチはボルト五本、ハーケン二本を使用した。

六P、左へのトラバースは、フリーで渡れば六級かも知れないが下がハングになつていたので落ちるのが恐く、あつさりボルトを一本埋めて横断する。

五層のトラバースから直上して凹角に入り、右に上している凹角をフリーで登つて行くと、出口はハングとなつていてまたもやボルトを打たされ、四〇段ギリギリでブッシュのテラスにあがる。ボルト、ハーケン各二本使用。

七P、脆い岩を右に横断し、草付からブッシュのリッジを登つて、四〇段で完全なブッシュ帯に入つて登攀終了。

帰路は奥壁側をアブザイレンで下降して大ハング下に出て、アプローチを逆戻りにワサビ沢を下降する。なお、六P目の凹角で残置ハーケンを発見したが、これは中央リッジの方から草付バンドと凹角をトラバースしてきた時に使用したものと思われる。使用ハーケン一三本、ボルト一六本。

〔タイム〕BP発(六・〇五) 終了点(九・三〇) 基部(一一・〇〇) ワサビ沢出合(一五・五〇)

南壁正面凹角
ルート(仮称)初登

一九七八年七月二十三日(晴)

◇パーティ 川木村智、田辺義治、長江洋一

かねてより狙つていた基部洞穴の左に切れこんでいるガリー状凹角を登攀すべく、南壁の押し出しを詰める。洞穴で正月にデポしておいたハーケン、ボルト類を回収して取付の凹角下にて登攀の準備

をする。

一P、フェイスを右に横断して凹角に入り、右側壁と左壁を直上すると出口はチョックストーンに阻まれた。ここを強引な登攀で越えたと小さなレッジに達してビレイ。取付から三〇段。

二P、そのまま脆くて濡れたガリーを直上するとしだいに傾斜が強くなり、左右の壁のフリクションを利用して登攀不能となつた。岩も脆くてボルトを打てず、直上を諦め一段降りた所にボルトをようやくのことで埋めた。それをピンにして左のフェイスに回り込み、傾斜の強いフェイスをハーケンの助けを借りて突破し、ハング下の小さなレッジでビッチを切る。このビッチ二五段でボルト一、ハーケン五本を使用する。

三P、頭上の二段のハングに挑み、ハーケンとボルトを交互に打つて下段のハングは越したが、その上はボルトもハーケンも打つ事が出来ずに進退極まつてしまった。しかも、最後に打つたハーケンが徐々に下に向いてきたため、あわててもう一本、半分ぐらいしか入らない不安定なハーケンを打つてはつと一息つく。

かなりの時間をアプミに乗つたまま費やした後、ようやく上段の出口まで体を一杯伸ばしてボルトを一本埋め込むことに成功し、ハング帯を突破する。

出口からはさらにもう一本ボルトを打ち、そのボルトの頭の上に立つて右手のガリーへトラバースを試みるが、最後の

軽量化になって 新登場!

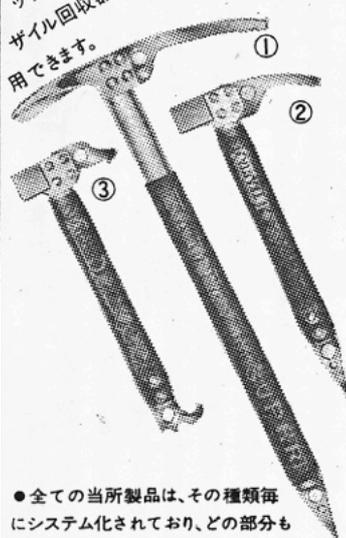
超々ジュラルミンの
採用によりバランスよく完成!

あらゆる登山に対応
できる多目的登攀用具

KAJITAX

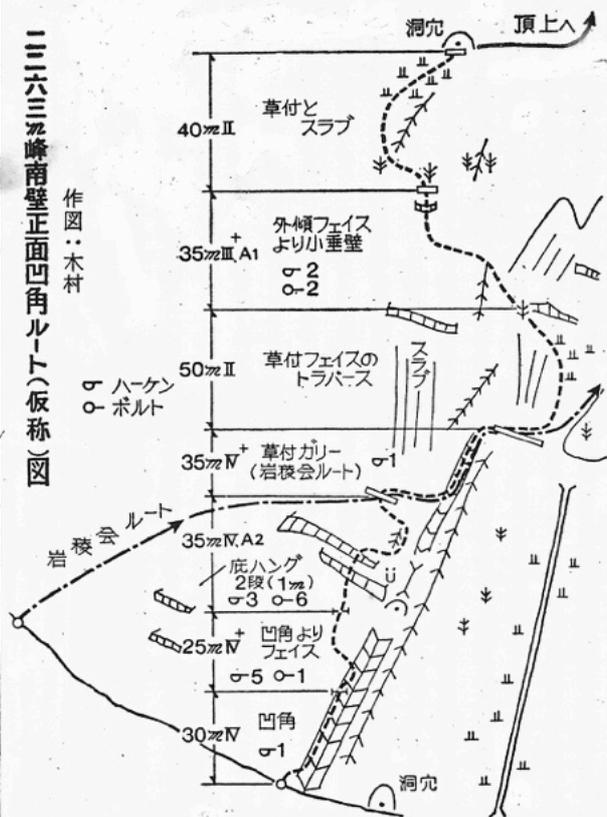
- 材質/ニッケルクローム鋼
クロームモリブデン鋼
- 重量/①ピッケル(70cm) 765g
②アイスハンマー 640g
③ロックハンマー 635g

各種パーツの組合せにより、200種類以上のピッケル、バイル、ハンマー、他ハーケン、回収器、ザイル回収器、スカイフック、スコップ等にも使えます。



●全ての当所製品は、その種類毎にシステム化されており、どの部分も互換性がありますので必要部分ずつ、お買い求めいただけます。

梶田製作所
〒487 愛知県春日井市大留町中成598
TEL (0568) 51-5110



四P、ルートを草付ガリーに取って右へのトラバースを開始する。ガリーの傾斜はしだいに急になり、三〇ほど登った、被り気味のクラックで行き詰まった。ここを苦心の末ランニング用ハーケンを一本打っておいて、オボジションと全身のフリクションを使ってようやく登り切る。ガリーの上はザイルが伸び切るとともに大きなテラスであった。

五P、ここでトップを長江と交代し、草付帯より緩いルンゼ状を左に大きくトラバースして大洞穴に達する。

六P、再びトップを交代し、左へ逆層のスラブをトラバース気味に左上する。しだいに傾斜が強くなり、最後は垂直となる。ここをボルトとハーケン四本で突破してブッシュのテラスに着く。三五、七P、左へカンをトラバースし、やさしい草付とフェイスを登ると再び大きな洞穴に達して事実上の登攀を終える。ここから右に大きくトラバースして右

フェイス上部のルンゼに出てようやくザイルを解き、さらにルンゼとブッシュの尾根を直上すると東南稜に出て、これを辿って頂上着。帰路はワサビ沢に取り暗くなった草付帯と沢を下って出合に出た。(タイム) 南壁沢出合(五・一〇) 取付(六・〇〇) 六・二〇 終了点の洞穴(一五・三〇) 頂上(一七・一〇) ワサビ沢下降点(一八・〇〇) 出合(二〇・二〇)

(記・木村 智)

訂正 地域研究明神岳(十)の五峯の冬季登攀の記述中(十月号掲載)、五峯東北稜冬季初登攀について、一九六七年十二月三十一日〜一九六八年一月一日にかけて雪嶺会パーティにより、また、未確認記録ですが東雲山溪会パーティによっても四峯側から登られているとの申し出がありましたので、おわびして訂正致します。

登攀史に調査不足の記述や、新しいルートの記録がありましたら、著者(〒454 名古屋市長区鳴子町四一五六―一七棟一三〇二号 木村智)まで御一報をお願いします。

ところで思い切りが足らず、とうとうジャンピングのお世話になる。しかし、このトラバースはそれでも厳しく、ようやくのことガリーに入り込む。ガリーからはフリーになり、左のカンテ状をフリーで登って大きな傾斜テラスまで、ほとんど一杯ザイルを伸ばす。ボルト六、ハーケン三本使用。テラスで昼食とする。